

ワークショップ参加者のことば

*C:コスチューム制作者/P:パフォーマー

C:ダンサーの方や歌手の方、他のデザイナーの方と、こんなに大勢でひとつのイベントを成し遂げるということは初めてで感動でした。「コレがやりたい!」という提案を積極的に受け入れてくださる環境だったので、複数の意見によっていろんなアイデアが生まれ、より面白いパフォーマンスになったのではないかと思います。

C:普段、自己の内を見つめ追求しながら制作をしている私にとって、パフォーマーという“他者”にまどってもらうことで完成するコスチュームを制作する、という経験は非常に刺激的なものでした。このワークショップに参加して、私のなかに生まれた新たな意欲をどんどん育てていきたいと思っています。

C:ひびのさんとの時間を数回重ねていくなかで、一筋縄ではいかない仕事をされている方の当たり前の厳しさと同時に、人や周囲への気配りや暖かい優しさが見えたとき、本当のプロフェッショナルのすごさを目の当たりにしました。

C:Mrs.Hibino's critiques and advice, even those give to other designers, were very useful! Being involved in this project reminded me how much I love to create and problem solve. Thank you for pushing all of us to realize our designs in interesting and creative ways.

C:全く知らない素材を扱うのは正直苦難の連続でしたが、パフォーマーの方が自分の作った衣装を着て思いもよらない踊りをしてくださることの胸に詰まるような感動、高揚感を知ってしまったので、もう後には戻れないと感じています。ですが、今回は自分の勉強不足、未熟さ、現場への無知を思い知りましたので一層真摯に制作に向き合いたいと思います。今回のプロジェクトは私の人生を大きく変えてくれました。

P:「衣装がパフォーマンスに負けてはいけない、勝ってもいけない」というひびのさんのことば!

P:衣装(家)とここまで深くかわったのは初めてだったので、たいへん面白く刺激的でした。今度は衣装作りから作品に入るのも面白いかもと、興味が広がりました。

P:衣によって身体が開発されて踊りが生まれてくるという思いもよらない出来事を体験できました。気付きもしなかった世界が開かれました。

P:羊毛の衣装は、私に無い世界観で、優しく包んでくれました。そうすると、今まで出したことのない音階やメロディが自然と出てきました。衣装に曲を紡ぎだしてもらいました。



Onion C:村尾拓美/ダンス:松元日奈子



キヌガサタケ C:山田好恵/ダンス:海保文江



足を食べる C:SEED/パフォーマンス:杉浦淳子



衣と胃 C:赤尾木織音/ダンス:桜井陽



捕食 C:藤田知穂/踊り:蒼浩人



へんしん C:佐保頌子/ダンス:カワムラアツノリ/演奏&歌:大澤加寿彦

SMFの目標の一つである アートプラットフォームづくり。

今回の長期ワークショップでは、小さいながらも、またひとつプラットフォームができました。プラットフォームは往来が頻繁でなければ意味がありません。これからも、さまざまなアーティストやアート大好きな人たちが、自分たちでプラットフォームを拡張、自在に往き来することを願っています。

山尾聖子(SMF運営委員)

あなたと
どこでも
アート
着がわり
プロジェクト

2015年7月18日(土)・19日(日) 三番町ギャラリー
7月25日(土)・26日(日) 川越市立美術館 市民ギャラリー
トリップクロス・ワークショップ 巨大織り機でみんなの「まち」を織ろう!

ワークショップは、講師の「旅する服やさんメイドイン」のユキハシモヒコさんの指導により、たくさんの人びとが持ち寄った古着を裂くところから始まりました。縦糸は着物地、横糸はTシャツやブラウスの裂き布。たくさんの人びとの参加によって織り上げられた1枚の大きな布は「まち」。整然と4段ずつ織られたのは「川越・蔵のまち」。そして、ネクタイによる「ビジネス街」。途中のリボンやボタンのアクセントは「まち」のポケットパークでしょうか。

7月18日夕方からはアルテクルブの協力により、オープニングトークを開催しました。まず、ユキハシさんの「旅する服屋さんの旅の記憶:路上〜インド標高5000m編」。

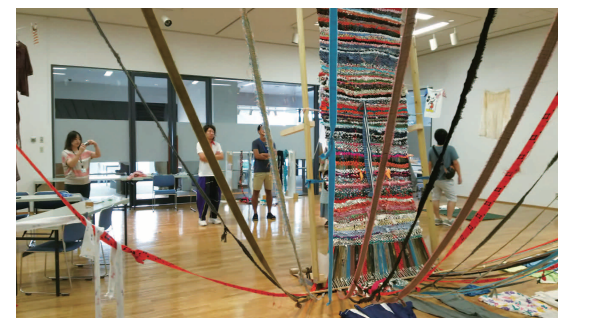
インド・ジャンムーカシミール州・ラダック地方で開催された「Earth Art Project 2014」に参加した模様をプロジェクターで投影してのお話でした。これは、インドの辺境地域の就学率向上のためのアートプロジェクトです。

その後は、越谷でアートプロジェクトを展開しているKAPLの大澤加寿彦さんのライブタイムになり、「旅する服屋さんの歌」「笑っていこう」を歌とギターで披露してくださいました。KAPLのメンバーも参加されて、ユキハシさんを中心にKAPLとアルテクルブの化学反応を見た夕方でした。



7月25日・26日は、川越市立美術館市民ギャラリーでのワークショップでした。ユキハシさんが、「これはみんなでつくり上げる『まち』なんだ!」と熱く語られてのオープニング。大きな織り機なので両脇に立つ人、織り機の下に潜って寝そべる人など、それぞれの手から手へ横糸をリレーしながら縦糸の間を交互に通していく共同作業です。待っている間にもみごとなチームワークで長い三つ編みを作り、それを横糸に加える工夫も生まれました。

人びとの思い出が人びとの手によって織りあがった大きな布「まち」は、夏の終わりごろ、小さなグッズになって参加した方がたのお手元に届きました。だれかの服がだれかの手に帰り完成です。谷平絵美子(川越市立美術館) 草野律子(SMF協力委員)



ワークショップ・展示

①三番町ギャラリー

7月18日(土)参加者人数:5名 来場者数:30名
19日(日)参加者人数:4名 来場者数:15名

②川越市立美術館 市民ギャラリー

7月25日(土)参加者人数:12名 来場者数:20名
26日(日)参加者人数:7名 来場者数:20名



2015.08.28